

西浜千軒遺跡の測量成果と地形形成に関する基礎的考察

—琵琶湖湖底遺跡の調査—

中川 永／大西 遼

人間文化学研究所博士後期課程・日本学術振興会特別研究員／人間文化学研究所博士前期課程・愛知県陶磁美術館

はじめに

滋賀県立大学琵琶湖水中考古学研究会では、2010年度まで同大学林博通研究室が行っていた水没村伝承遺跡の調査を、中川を代表として継続的に行っている。2014 - 2015年度は、研究会発足時からの調査地である西浜千軒遺跡の調査を引き続き行い、また近接する長浜城遺跡についても調査を行った。本稿で報告するのは、このうち前者におけるもので、西浜千軒遺跡に関わる4回目の報告となる。

1. 調査概要

(1) 位置と環境

当遺跡は長浜市祇園町の沖合に所在する湖底遺跡であり、「かつて西浜村とよばれる集落が存在したが、室町時代の寛正年間(1460 - 1466)に起きた大地震により湖底に沈んでしまった」と伝承が伝わっている(図1)。この集落がかつて存在したことは、長浜八幡宮の神宮堂塔建立の資金調達を目的とした猿楽の収支記録である、『永享七年勸進猿楽奉加帳』から明らかであり、現在も残る祇園町や相撲町と共にその存在が認められる。

従来、その実態は水没井戸や石垣の伝承が残るのみで全く不明であった。本研究会におけるこれまでの調査によって、湖底に実際に集落が沈んでいることが明らかになるとともに、原因となった地震が伝承とは異なる天正13年(1586)であることや、また当該期以外にも、多数の遺物が散布する複合的な遺跡であることが明らかとなっている〔中川2012〕〔中川2013〕〔中川・大西・谷口2014〕。

(2) 2014から2015年度の調査体制

調査は少人数ながら、昨年度に引き続き新規の学部生数名や学外の研究者を交えつつ和気藹々で行っている。2014年度の調査日数は34日を数え、うち19日を西浜千軒遺跡で実施した。また2015年度は現段階で25日実施しているが、この大半は長浜城遺跡におけるものである。

2. 湖底地形の測量成果

(1) 測量調査の目的と方法

当遺跡の湖底においては、特徴的な起伏を呈する地形が数か所で認められることが以前から確認されており、また大半の遺物がそれら周辺において確認されてきた。従来調査においては、これら地形を調査区設定の基準とし、遺物の分布調査を行ってきたが、最終的な報告にあたってその詳細な地形図の提示は必須であると考え、地形測量を実施した。

水中地形の測量にあたっては、サイドスキャンソナーに代表される音波探査機器を用いる方法が一般的である。しかしながら西浜千軒遺跡は遠浅の地形で、特に先述の湖底の高まりは、水位低下時には水深0.2m以下¹⁾という、極端な浅瀬になる場合もある。こうした環境下にあっては、船舶の利用を前提とした音波探査は不可能であることから、本調査においては古墳等の測量調査と同様に、平板とレベルを用いた陸上と同様の手法で行った。調査員である学生の実技指導を兼ねながらの作業であったが、最終的には沖合約160m、湖岸線約340m、総面積約54400㎡という範囲について十分な精度の図面を作成することができた。

(2) 湖底地形の状況と各調査区の様相

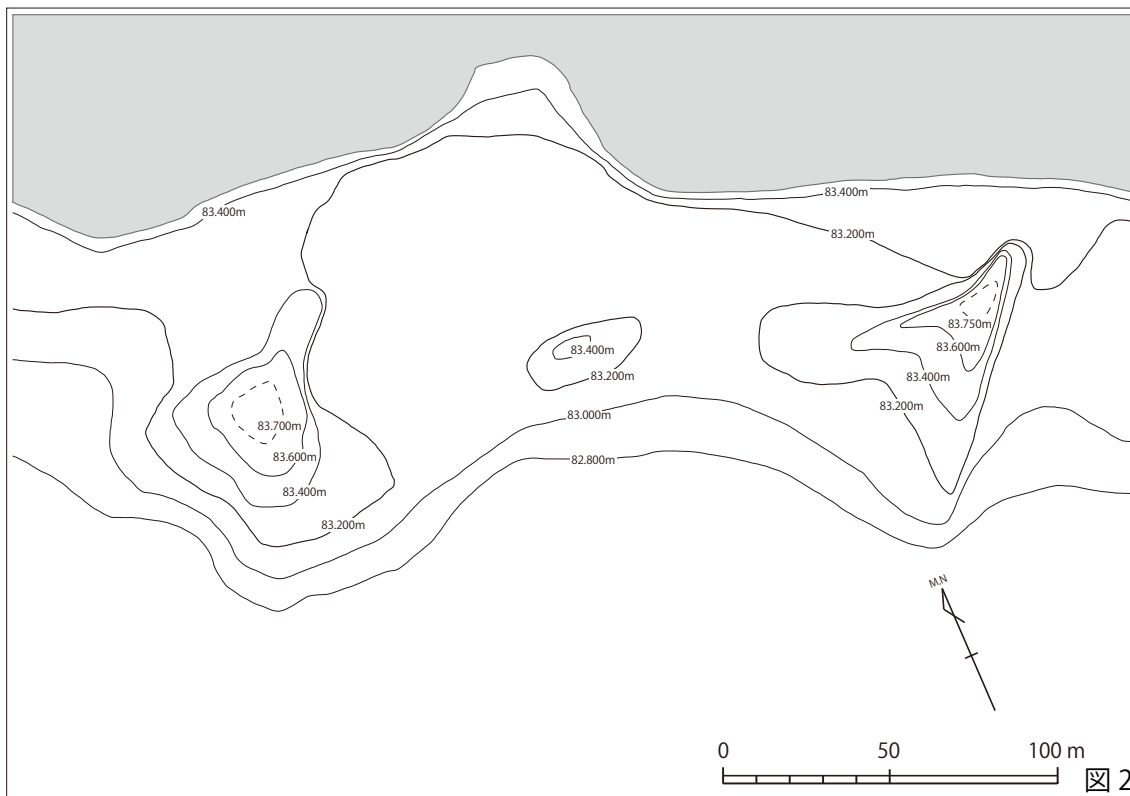
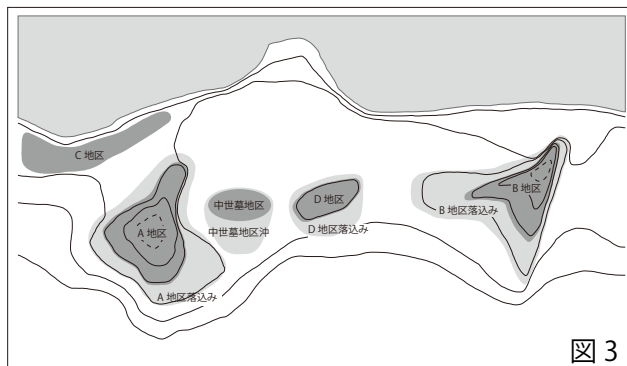
図2が完成した測量図であり、先述した湖底の高まりは3ヶ所で確認され、従来の見解を追認することができた。またこれを基に、調査区の配置を示したのが図3である。これに沿って地形及び調査区の様相を概観したい。

A地区は調査地の西部に所在する東西40m、南北60m程度の高まり地形で、標高は最高部で約83.7mを測る。当遺跡において遺物の最も集中する調査区の1つである。また周囲には、この高まりが波の営力で崩壊したと考えられるゆるやかな落ち込み状の地形が認められる。

B地区は調査地の東部に所在する東西約40m、南北約50mの楔形の高まり地形で、標高は最高部で約83.7mを測る。A地区同様に当遺跡において遺物の最も集中する地区の1つであり、また周囲にはゆるやかな落ち込み状地形が確認できる。



図1 西浜千軒遺跡位置図
 図2 西浜千軒遺跡湖底地形測量図
 図3 西浜千軒遺跡調査区配置図



C地区は調査区の西端部に所在する、水深83.2m前後の低水位部であり、特徴的な堆積状況は全く確認されない。しかしながら、確認される遺物には湖成鉄の付着の著しいものや、あるいは古代瓦の破片などが確認されるなど、他の調査区と比べやや様相を異にする。

D地区は調査地の中央部に所在する東西約35m、南北約15m程度の比較的小規模な楕円形の高まりであり、標高は最高所で約83.4mを測る。沖側にはA・B地区と同様に波の営力で崩壊した結果と考えられる、ゆるやかな落ち込み状地形が広がっている。

中世墓地区は2011年度に報告した中世墓地遺構の所在する範囲であり、拳大から人頭大の石材で形成された方形区画や集石のほか、石仏や五輪塔などの遺物が出土している。墓地を構成する石材は角の明確な山石様のものが大半であり、他地点における小礫群とは明らかに出自を異にするものである〔中川2012〕。

以上が、西浜千軒遺跡における調査区の概況であり、それぞれが遺物集中区を形成している。作成された測量図や、A・B・D地区の高まり地形を形成する小礫の様相から、これらが元来は河川営力によって堆積した、河口部にほど近い地形であることが予想される。しかし16世紀には中世墓が形成されることから、遅くともこの頃には完全な陸上となっていたことが確実である。よってこれら地形の形成状況や土地利用について、次節以降で表採遺物を基に検討していきたい。

3. 2014から2015年度調査における表採遺物

(1) 概要

当遺跡においては、これまでに300点を超える遺物を確認し、それらのうち年代を決定し得るものについて報告を行ってきた〔中川2012〕〔中川・大西・谷口2014〕。ここでは2014年度報告以降に確認された遺物について報告し、議論の前提となる遺物の様相について纏めたい。なお各遺物の年代観については、田辺昭三〔田辺1981〕、植田文雄〔植田1994〕、山下峰司〔山下1995〕の各論考に依っている。以下、時代毎に説明していく。

(2) 遺物について：図4

1は土師器の高杯脚部である。表面はローリングの影響を受け、細かな調整は不明であるが、4世紀

に所属するものであろう。

2～7はいずれも初期須恵器の甕体部片で、5世紀前半代の資料である。2は頸部の接合箇所にあたる部分である。上端部には頸部接合に伴う粘土の貼り付けが見られ、その周囲は横ナデを施す。外面には平行タタキ、内面は同心円当て具痕をスリ消す。3は外面に平行タタキを施し、内面は同心円当て具痕をスリ消している。4は外面に平行タタキを施し、その後スリ消している。内面は同心円当て具痕が明瞭に残り、スリ消しは行わない。5は外面に平行タタキを施し、内面には当て具痕などは全く見出すことができない。6は外面には平行タタキなどは見られず、ナデ消したものと考えられる。内面は指ナデもしくは無文当て具様の凹みが確認され、同心円文様等は見られない。7は外面に平行タタキを施し、また当て具原体の木目が浮き出ている。内面は平行タタキ目様の当て具痕跡をスリ消している。

8は須恵器の高杯蓋である。全体に湖成鉄が厚く沈着しており、細かな調整や元来の色調を確認することはできないものの、6世紀代の遺物である。

9は須恵器の杯B蓋で、口縁部付近の小片であるものの、磨滅は比較的少なく、原位置を大きく動くものではないだろう。8世紀前半代の遺物である。

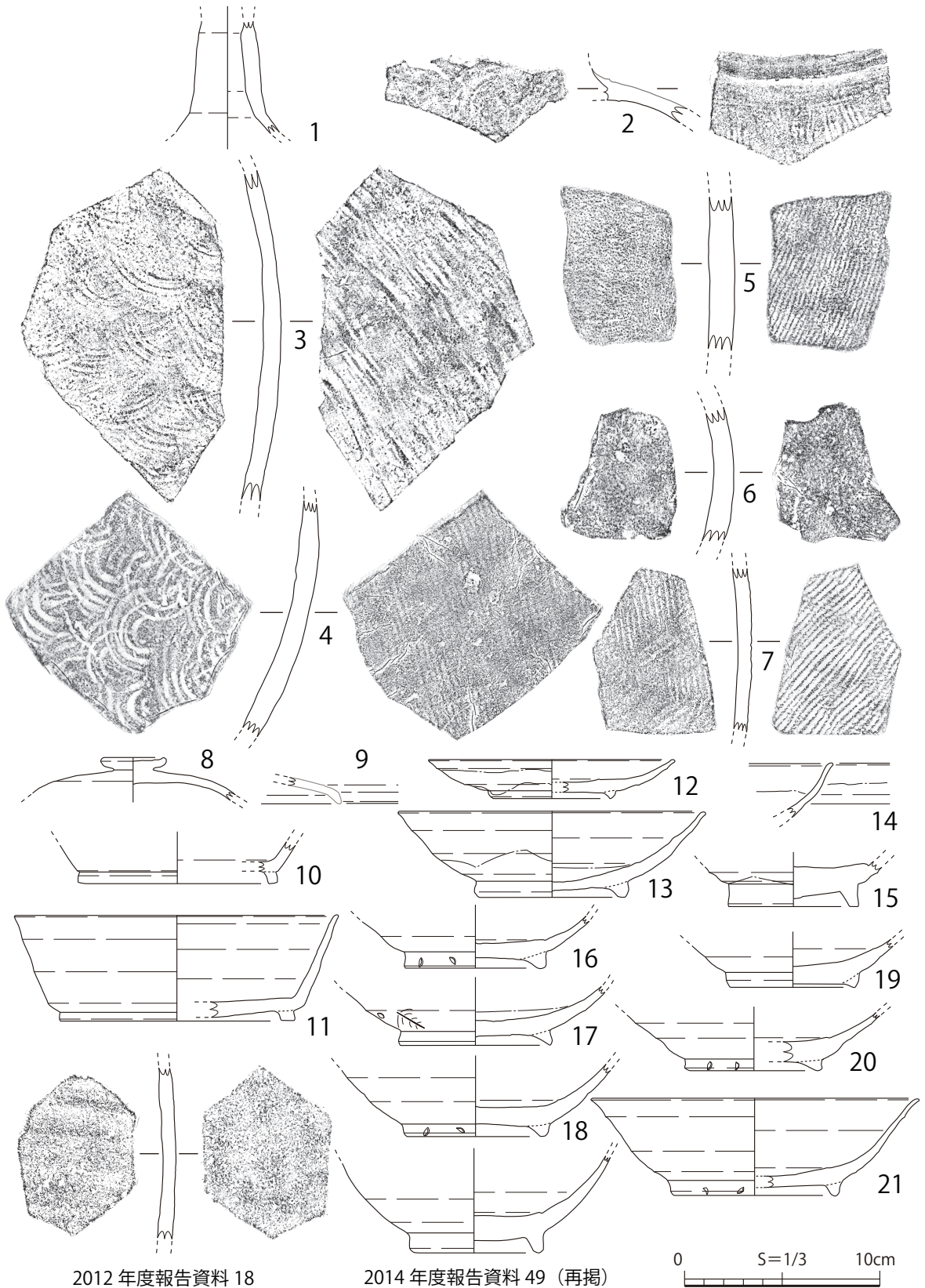
10～11は須恵器の杯B身で、いずれも8世紀代の遺物である。当遺跡において、杯B身はこれまで約10点が確認されているが、11はその中でも残存状況の良いものである。

12は灰釉陶器の皿である。内面には全体に自然釉が付着し、外面には自然釉及び灰釉ツケガケに伴う釉の2種類が確認できる。高台が極めて退化的な傾向を示し、また底部は糸切後未調整である。10世紀後半の遺物と考えられる。

13～14は灰釉陶器の椀Aである。13は全体にナデ調整であり、内面では見込部を除き自然釉が付着し、外面では下半部まで灰釉をツケガケする。10世紀前半の遺物である。14は口縁部付近の小片であるが、体部下半に回転ヘラケズリを施し、また内外面に灰釉をツケガケすることから、10世紀前半の遺物と考えて問題だろう。

15は白磁碗である。森達也氏(元愛知県陶磁美術館学芸課長、現沖縄県立芸術大学教授)のご教示によると、12世紀代の資料である。

16～21は山茶碗である。いずれも尾張型であり、21は4型式(12世紀初頭から第3四半期)、16～20



2012 年度報告資料 18

2014 年度報告資料 49 (再掲)

図4. 表採遺物実測図

は5型式(12世紀第4四半期から13世紀第1四半期)の遺物である。なお、16は内面全体に墨状の黒色付着物が認められることから、転用硯として利用された可能性がある。

〈2011年度報告資料18〉は、〔中川2012〕において表・写真のみで紹介した資料である。当時はその性格を明らかにし得なかったが、その後の検討により経筒外容器である可能性が高いことが明らかとなった。復元される直径は16.8cmである。同様の胎土・焼成である山茶碗が多数表採されており、その大半が当資料と同様にB地区に集中する。このことから、12世紀代の資料と捉えたい。

〈2014年度報告資料49〉は、〔中川・大西・谷口2014〕で詳細不明とした遺物であるが、森達也氏のご教示により、12世紀代の福建省産の白磁碗であることが明らかとなった。

4. 西浜千軒遺跡の地形形成・利用を巡る基礎的考察

(1) 年代毎の遺物分布状況と地形の形成過程

当遺跡全体における大局的な年代観については2014年度報告で示した通りであるが〔中川・谷口・大西2014〕、今回の報告資料を加え再編したものが図5である。これから明らかな通り、8世紀と12世紀に盛期が確認され、14世紀には全く遺物が確認されなくなり、15世紀以降に新たな遺跡として展開していく。では、こうした状況は遺跡調査区全体で普遍的な状況なのであろうか。

表1-1・2では、これまで報告した遺物について、年代と表採調査区を一覧として示している。またこれを基に各時代・調査区ごとの年代観をグラフ化したのが、図6である。

各盛期前後における様相を確認していくと、8世紀以前には少数ながらも広い調査区に跨って遺物が分布し、同様の状況は10世紀頃まで継続的に確認することができる。しかしながら、当遺跡が弥生時代以来、継続的に人々が生活し続けた遺跡と考えるには、いささか無理があるだろう。つまりこうした状況は、先に述べた様に該当地が河川営力によって形成されたという出自と密接に関わるものであり、恐らくはより内陸部に所在したであろう遺跡から、礫と共に多くの遺物が流れ込んだ結果と捉えられよう。ただし、遺物の中にはローリングをほとんど受けないものも多く、想定される母体遺跡はそう

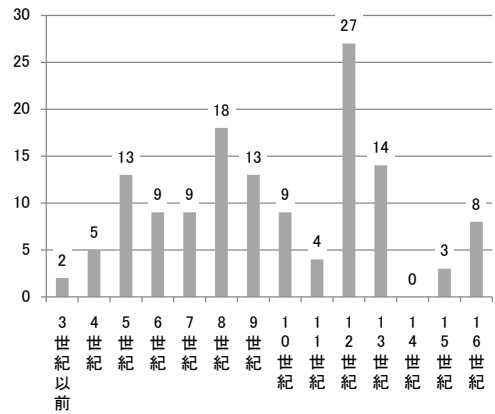


図5. 表採遺物から見た西浜千軒遺跡の消長

遠い場所ではないと推察される。あるいは、一部には直接当地で用いられた遺物もあるのかもしれないが、現段階では明らかにし得ない。

続いて12世紀における状況を確認すると、それ以前とは様相を全く異にする。遺物の大半はB地区及びその落込み部からの表採であり、対になる河川堆積地形であるA地区では僅かに1点のみである。前後する時代についても、11世紀ではB地区のみの表採であり、また13世紀にも同様に偏った状況である。このような極端な偏りが、河川や湖流による自然的堆積作用によって生じた結果とはにわかに考え難い。よって12世紀における盛期については、当該期の人々による積極的な活動の結果、遺物がもたらされたと考えらるべきであろう。

その後、14世紀には遺物が全く確認されなくなり、15世紀以降に新たな遺跡として、伝承にある西浜千軒遺跡(西浜村)が展開していく。この頃には中世墓地区が明瞭な遺構として展開することから、従来河口近くであった地形が何らかの理由で陸地化していたことが確認できる。

(2) 12世紀の土地利用に関する基礎的考察と課題

上記の様相から浮き上がる問題点として、12世紀代における盛期がどのような人間活動の結果、成立したものであるのかという課題がある。これは当然ながら、中世墓形成以前、どの段階で土地が陸化したのかという問題とも密接に関わる可能性を有する。

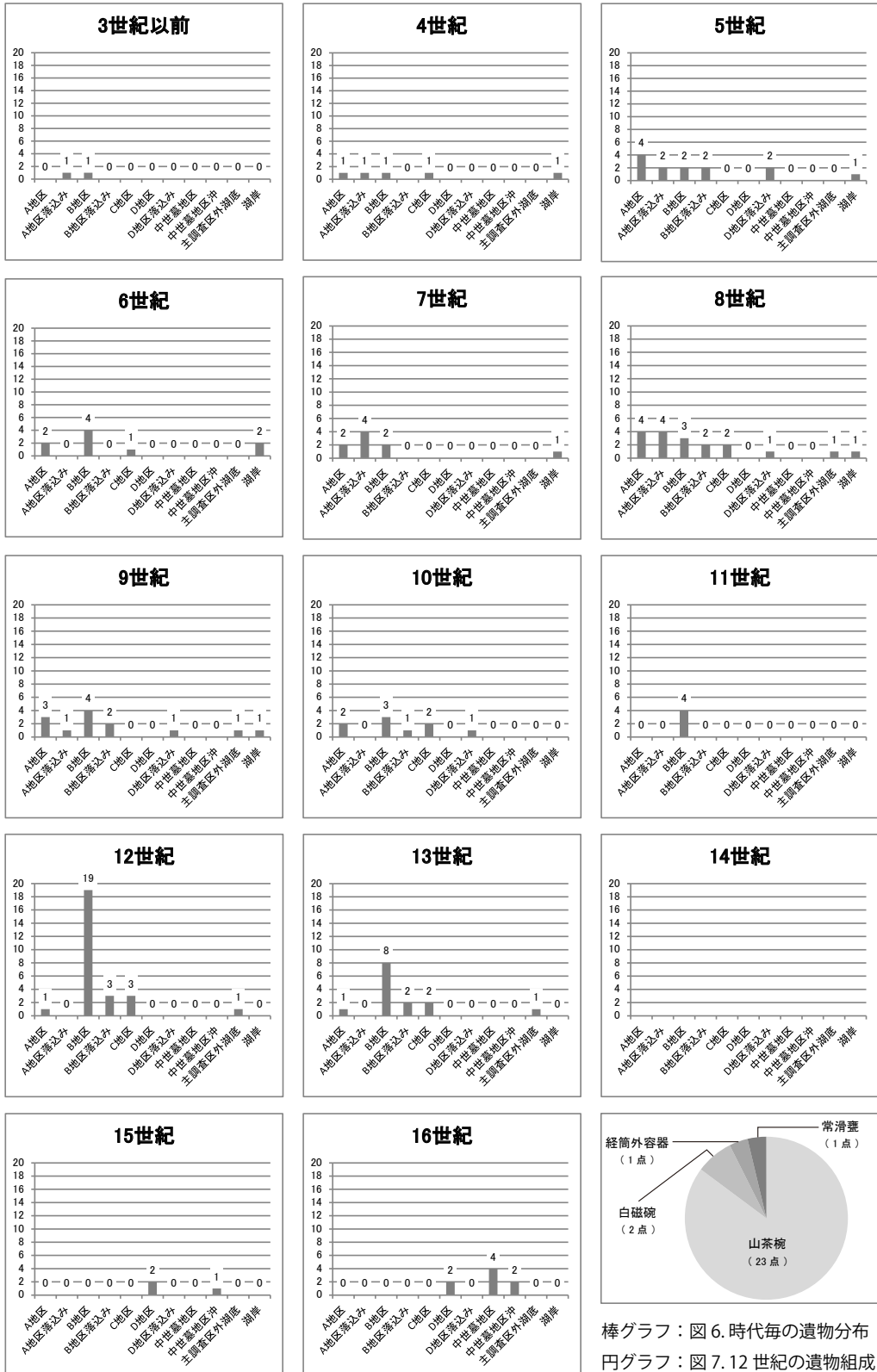
ここで当該期の遺物組成に着目したい(図7)。

表 1-1. 西浜千軒遺跡表探遺物の所属年代と調査区①

報告年次	遺物番号	種別	器形	年代	出土地区
2012	1	石仏		16世紀	中世墓地区
2012	2	一石五輪塔		16世紀	中世墓地区
2012	3	五輪塔	空風輪	16世紀	中世墓地区
2012	4	五輪塔	空風輪	16世紀	中世墓地区
2012	5	灰釉陶器	椀B	10世紀前半	D地区落込み(沖側)
2012	6	灰釉陶器	椀A	10世紀前半	B地区
2012	7	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	C地区
2012	8	山茶椀	椀	12世紀第4四半期—13世紀第1四半期	C地区
2012	9	灰釉陶器	皿	9世紀後半	B地区
2012	10	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	B地区
2012	11	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	B地区
2012	12	山茶椀	椀	12世紀第4四半期—13世紀第1四半期	B地区
2012	13	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	B地区
2012	14	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	B地区
2012	15	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	B地区
2012	16	山茶椀	椀	11世紀後半	B地区
2012	17	山茶椀	椀	12世紀初頭—第3四半期	B地区
2012	18		経筒外容器	12世紀か	B地区
2014	1	土師器	高杯	3世紀—4世紀	B地区
2014	2	土師器	高杯	3世紀—4世紀	A地区落込み(北側)
2014	3	土師器	高杯	4世紀—6世紀	湖岸表探
2014	4	土師器	甕	4世紀後半	A地区
2014	5	須恵器	甕	5世紀前半	A地区落込み(沖側)
2014	6	須恵器	甕	5世紀前半	D地区落込み(沖側)
2014	7	須恵器	甕	5世紀前半	B地区落込み(沖側)
2014	8	須恵器	甕	5世紀前半	A地区
2014	9	須恵器	甕	5世紀前半	B地区落込み(沖側)
2014	10	須恵器	甕	5世紀前半	湖底表探
2014	11	須恵器	甕	5世紀前半	D地区落込み(沖側)
2014	12	須恵器	杯H蓋	6世紀末—7世紀初頭	A地区
2014	13	須恵器	杯H蓋	6世紀代	B地区
2014	14	須恵器	杯H蓋	6世紀末—7世紀初頭	湖岸表探
2014	15	須恵器	杯H蓋	6世紀末—7世紀初頭	B地区
2014	16	須恵器	杯H身	6世紀末—7世紀初頭	B地区
2014	17	須恵器	杯G身	6世紀末—7世紀初頭	A地区
2014	18	須恵器	平瓶	7世紀代	A地区落込み(北側)
2014	19	須恵器	甕	7世紀代	A地区落込み(沖側)
2014	20	須恵器	甕	6世紀代	B地区
2014	21	須恵器	杯B蓋	8世紀後半—9世紀初頭	湖岸表探
2014	22	須恵器	杯B蓋	8世紀後半—9世紀初頭	D地区落込み(沖側)
2014	23	須恵器	杯B蓋	8世紀後半—9世紀初頭	A地区
2014	24	須恵器	杯B蓋	8世紀後半—9世紀初頭	A地区
2014	25	須恵器	杯B身	8世紀—9世紀初頭	B地区落込み(沖側)
2014	26	須恵器	杯B身	8世紀—9世紀初頭	A地区
2014	27	須恵器	杯B身	8世紀—9世紀初頭	調査区外東地区河口
2014	28	須恵器	杯A又はB身	8世紀—9世紀初頭	B地区
2014	29	須恵器	杯B身	8世紀—9世紀初頭	B地区
2014	30	須恵器	杯B身	8世紀—9世紀初頭	B地区

表 1-2. 西浜千軒遺跡表探遺物の所属年代と調査区②

2014	31	須恵器	杯A又はB身	8世紀-9世紀初頭	B地区落込み(沖側)
2014	32	須恵器	杯A又はB身	8世紀-9世紀初頭	A地区落込み(沖側)
2014	33	土師器	皿	8世紀代	A地区
2014	34	土師器	甕	7-8世紀	A地区落込み(沖側)
2014	35	土師器	甕	7-8世紀	A地区落込み(西側)
2014	36	灰釉陶器	椀A	10世紀第1四半期	B地区落込み(西側)
2014	37	灰釉陶器	椀B	10世紀後半-11世紀前半	B地区
2014	38	灰釉陶器	椀A小型品	10世紀後半	B地区
2014	39	灰釉陶器	椀	11世紀前半	B地区
2014	40	山茶椀	椀	12世紀初頭-第3四半期	B地区落込み(沖側)
2014	41	山茶椀	椀	12世紀初頭-13世紀第1四半期	B地区落込み(沖側)
2014	42	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	調査区外東地区沖
2014	43	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	B地区
2014	44	山茶椀	椀	12世紀初頭-13世紀第1四半期	B地区落込み(沖側)
2014	45	山茶椀	椀	12世紀初頭-13世紀第1四半期	B地区
2014	46	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	B地区
2014	47	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	C地区
2014	48	詳細不明	鉢底部	詳細不明	D地区落込み(沖側)
2014	49	白磁	椀	12世紀	B地区
2014	50	灰釉陶器	壺又は瓶類	10世紀後半	A地区
2014	51	東播系中世須恵器	片口鉢	11世紀後半	B地区
2014	52	詳細不明	甕	詳細不明	D地区落込み(沖側)
2014	53	常滑	甕	12世紀	B地区
2014	54	越前or信楽	甕	中世後期	D地区沖
2014	55	越前か	擂鉢	中世後期	中世墓地区沖
2014	56	越前or信楽		中世後期	D地区落込み(沖側)
2014	57	土師器	皿	16世紀前半	中世墓地区沖
2015	1	土師器	高坏	4世紀	C地区
2015	2	須恵器	甕	5世紀前半	A地区
2015	3	須恵器	甕	5世紀前半	A地区
2015	4	須恵器	甕	5世紀か	A地区落込み(沖側)
2015	5	須恵器	甕	5世紀前半	B地区
2015	6	須恵器	甕	5世紀前半	B地区
2015	7	須恵器	甕	5世紀前半	A地区
2015	8	須恵器	高杯蓋	6世紀	C地区
2015	9	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	C地区
2015	10	須恵器	杯B身	8世紀	C地区
2015	11	須恵器	杯B身	8世紀	A地区
2015	12	灰釉陶器	皿	10世紀後半	C地区
2015	13	灰釉陶器	椀A	10世紀第2四半期	A地区
2015	14	灰釉陶器	椀A	10世紀第1四半期	C地区
2015	15	白磁	椀	12世紀	B地区
2015	16	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	B地区
2015	17	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	B地区
2015	18	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	B地区
2015	19	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	B地区
2015	20	山茶椀	椀	12世紀第4四半期-13世紀第1四半期	A地区
2015	21	山茶椀	椀	12世紀初頭-第3四半期	B地区



棒グラフ：図 6. 時代毎の遺物分布

円グラフ：図 7. 12世紀の遺物組成

ここから明らかな通り、煮沸形態や貯蔵形態はほとんど認められず、生活空間としての利用は考え難いことが分かる。むしろ経筒外容器や複数確認される転用硯の存在からは、明らかに庶民階層とは異なる人々の存在が浮き上がってくる¹⁾。唯一の貯蔵形態である常滑甕も、いわゆる経甕と呼ばれる中型品であり、日用雑器とは異なる性格を有する可能性がある。

経塚造営の盛期は12世紀であるとされ、当遺跡の盛期と一致する〔杉山2007〕。よっておそらくは、B地区を構成する高まりを、こうした活動の場として設定した人物もしくは集団が存在したと考えられる。仮にここに経塚が形成されたと考えられるのであれば、水位変動によって容易に水没し得る場所であったと考えるのは不自然である。つまりこれ以前の時期、おそらくはB地区に遺物が集中する11世紀頃には、当遺跡は完全に陸化していたものと考えられよう。

もちろん、上記の変遷過程は遺物組成から見た一方的なものに過ぎず、琵琶湖の歴史的水位変動や地盤の隆起沈降を始めとした陸地と水面の相対的比高差の変動や、あるいは水辺の祭祀などの諸活動を念頭にした、更なる議論が必要であることは言うまでもない。特に、長浜地域で最大の堆積作用をもつ姉川の影響が強いことは、推して量るべきである。加えてやや時代が遡る可能性はあるが、西浜千軒遺跡の北部に隣接する相撲湖底遺跡の発掘調査においては、律令期以降のものとされる齋申が出土しており、今後は周辺の地質学的・歴史学的背景を加味した上で、検討を行っていく必要がある〔滋賀県教育委員会2003a,b〕。

5. おわりに

以上、今回の地形測量成果と、それを基としたいくつかの議論を行った。やや煩雑になった感はあるが、2011年度から行っている西浜千軒遺跡の調査について、当初想定されてきたほぼ全ての作業を終えることができたことは大きな成果である。今後は、前述した遺跡の形成や土地利用の問題について検討し、最終的な目標である報告書の発行に向けて取り組んでいきたい。

なお最後になるが、測量調査に参加してくれた佐々木優君が、あまりに若くして逝ってしまった。

当研究会だけでなく、他の課外活動にも熱心に参加するなど将来が期待されただけに心底残念と言うほかない。今でも地形図を眺めると、彼がエスロンテープを持ち、水草だらけの琵琶湖を四苦八苦しながら歩いていた光景が思い出される。本稿を佐々木君の墓前に捧げたい。

■調査参加者(学年は2014年度のもの)

〔滋賀県立大学〕中川永(博士後期過程2回生・日本学術振興会)、谷口哲也(博士前期課程2回生)、大西遼(博士前期課程2回生・愛知県陶磁美術館)、馬場将史・黒田昴嗣(学部4回生)、伊藤航貴・下澤卓巳・杉山佳奈・田中杏奈・西澤光希(学部3回生)、伊田匠・小栗里菜・河本愛輝(学部2回生)、佐々木優(学部1回生)、〔学外〕山本遊児・手塚希望(アジア水中考古学研究所)、堀寛之(鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事)

〔註〕

- (1) 琵琶湖の水位は日々変動しているため、本稿では基準水位である T.P. + 84.371m に換算した値を用いている。
- (2) 転用硯については、〔中川・大西・谷口2014〕を参照されたい。

〔参考文献〕

- ・植田文雄1994「古墳時代土器論—近江の土師器、その変遷と画期—」『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会
- ・滋賀県教育委員会2003a「琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡(第一分冊・本文編)」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7』
- ・滋賀県教育委員会2003b「琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡(第二分冊・資料編)」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7』
- ・杉山洋2007「経筒」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
- ・田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- ・中川永2012「西浜千軒遺跡調査概報—琵琶湖湖底遺跡の調査—」『人間文化』第31号 滋賀県立大学人間文化学部

- ・中川永2013「西浜千軒遺跡における自然科学分析について—琵琶湖湖底遺跡の調査—」『人間文化』第33号 滋賀県立大学人間文化学部
- ・中川永・大西遼・谷口哲也2014「西浜千軒遺跡の消長と新発見の遺構群について—琵琶湖湖底遺跡の調査—」『人間文化』第36号 滋賀県立大学人間文化学部
- ・山下峰司1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会



図版2. 灰釉陶器皿の散布状況(図4-12)



図版1. 須恵器杯B身の散布状況(図4-11)



図版3. 白磁碗の散布状況(図4-15)

Comment

中井 均

人間文化学部地域文化学科教授

滋賀県立大学琵琶湖水中考古学研究会では、長浜市に所在する水没村伝承遺跡である、西浜千軒遺跡の調査を実施してきた。その成果はすでに研究会の代表である大学院博士後期課程の中川永君によって『人間文化』誌上に3編の研究ノートとして発表されている。

今回は遺跡の地形測量の成果報告である。この測量で、調査当初に計画していた作業はほぼ終わることができた。調査地は水深0.2m以下という浅瀬であるため、船舶を利用した音波探査が不可能であり、平板とレベルを用いた地上と同じ手法を用いておこなわれた。

調査の結果、湖底地形に3ヶ所の高まりが確認さ

れ、それぞれの高まりが遺物集中区を形成していることが明らかにされた。

こうした地形の構造と遺物の年代とを照合して、10世紀まで内陸部にあった遺跡から流れ込んだものが、12世紀になると遺跡地が積極的活動の場となり、さらに15世紀以降新たな村落が形成されたと分析している。

なお、今後はこれまでの一連の研究を踏まえ、最終的な目標である報告書にまとめられる予定である。

水中考古学は琵琶湖岸に立地する滋賀県立大学ならではの研究分野である。こうした水没村伝承遺跡の調査が後進に与える影響は大きい。研究会の今後に大いに期待したい。